

ウェンデル・ベリーの自然観

三 国 千 秋 *

Wendell Berry's Concept of Nature

Chiaki Mikuni *

Received October 31, 2001

はじめに

筆者は、かつて、ドイツの哲学者、エルンスト・ブロッホの自然哲学を論文に取り上げたことがある（「ブロッホの自然概念」（『北陸大学紀要』、第四号、1980年）。その際に、自然を主として三つの観点から分類した。第一に、「素材（もしくは材料・原料）としての自然」であり、これは天然資源・自然資源などとみなされる場合の自然である。第二に、「自然法則との連関でいわれる自然」であり、これは西欧近代哲学の「機械論的自然観」に代表されるものである。最後に、ブロッホに固有の「物質」観から主張される「自然主体」の概念を検討した。

以来20年がたったが、筆者は次第に、「素材（もしくは材料・原料）としての自然」観（天然資源・自然資源）や「自然法則としての自然」観について疑問を抱くようになった。そのきっかけは、この10年間に、地域あるいは地球的規模での環境問題に関心をもち、微力ながら地域の環境保護や環境対策、環境教育に関わるという経験をもったことによる。そうした経験を通して見えてきたことは、上記二つの自然観が確かに自然現象の一面を正しく捉えているが、決して自然に対する十分な理解とはいえないことであり、近代以降、特に現代の自然科学とその応用的学問である科学・技術が合い携えて自然を利用して来たことが、今日の環境問題や自然破壊を惹き起こす一因になったとも考えられるからである。とはいえ、先に挙げた二つの自然観、すなわち「素材（材料・原料）としての自然」観や「自然法則としての自然」観は現代の自然に対する見方にも引き続き大きな影響を与えているだけでなく、むしろ主流といえるものである。

西洋哲学史の分野を見るならば、例えば、T.J.コリングウッドは『自然の観念』（平林・大沼訳、みすず書房、1974年）において、これまでの自然観を大きく、古代ギリシアのロゴスの秩序に基づく自然観、近代の機械論的自然観、およびその延長線上にある現代の進化論的生物学や物理学的宇宙論に代表される自然観に分類している。現代の進化論的生物学や物理学的宇宙論などは、筆者の力量に余るものであり何ら述べることはできないが、古代ギリシアの自然

* 外国語学部
Faculty of Foreign Languages

観や近代の機械論的自然観については、哲学史の分野で、おおむね人々の間に共通の理解が定着しているといつてよい。

また、故高木仁三郎氏の『いま自然をどう見るか』（白水社、1998年）という書物は、近年わが国に現れた自然観についての研究でも優れた仕事であるように思われる。高木氏は、古代ギリシアの自然観や近代の自然観を扱うさいに、基本的にはコリングウッドの解釈を踏襲している。もっとも、彼は、プラトンやアリストテレスらの「観察されるもの」としての自然観を「知の自然観」と呼び、これに対して、例えばヘシオドスの『労働と日々』に見られるように「民衆の手の労働や生活と結びついた」、民衆的な「手の自然観」を対比させている。⁽¹⁾

だが、ここで注目すべきは、高木氏が、彼自身のライフワークとして関わって来た、原子力エネルギーの利用と原子力発電の危険性を立証することを通じて、現代の科学・技術に対する批判の中から、再度、われわれにとって自然とは何を意味するかを問うている点である。筆者が、ここで自然観を問う理由も、まったく高木氏と同じ線上にあるものである。今日、環境保護や自然保護、環境対策のさいに、「自然にやさしい」とか「地球にやさしい」、「自然との共生」、あるいは「循環型社会」や「持続可能な開発」、「持続可能な社会」ということがいわれるが、これはより厳密にいうとどういうことであるのか。また、われわれの日々の暮らしやライフスタイルとどのように関わるのか。自然に対する人間の接し方や行動様式はいかなる自然理解や自然観に基づくのか、を問うことがこの論文の目的である。

そうはいつても、ここで論じられるのは、もっぱら一人のアメリカの現代詩人、小説家、評論家であるウェンデル・ベリーの自然観・自然理解を取り上げ解釈することである。彼は、これまで自然や環境、農業、コミュニティと文化について優れた評論を発表してきた。ベリーを取り上げる理由はまた、彼がここ30年以上にわたり、アメリカの一地方における一人の農夫として自然に関わりあってきたということによる。一つの自然理解の事例あるいは範例として、農業への関わりから彼が自然をどう見ているか、彼の目には既存の自然観や自然概念がどう見えるかという点に筆者が興味をもつからである。

1. 自然に対する見方について

見られる自然、観察される自然

ベリーは、現代人の自然に対する一つの特徴的な見方を「見られる自然」とみなしている。この見られるものとしての自然は「景色の良い (scenic)」という言葉で言い表される。すなわち、「一つの光景は、<観察者によって見られるものとしての>場所を意味している。」⁽²⁾

観光資源としての自然とは、まさにこのような「見られる自然」を代表すると言ってよい。このような自然とは、週末にレクリエーションのためにそこを訪れるような場所であり、さらには雑誌のグラビアやテレビのコマーシャルに用いられるような、一枚の切り取られた写真としての光景である。そして、現代では、多くの自然保護論者と呼ばれる人々の間においても、このような見られるものとしての自然、雄大で美しい自然の光景が自然保護の対象となっている、とベリーは述べている。

今日、日本の人口の約47%が、人口20万人以上の「特例市以上の都市」（すなわち政令指定都市、中核市、特例市）に住んでいるといわれる。また、人口20万未満の、非過疎地域に約

47%が住んでいるといわれる。⁽³⁾ このように多くの人びとが都市に住むようになった今、われわれの自然に対する見方も当然変わって来たといえる。

確かに、われわれは雄大な自然や美しい自然の光景を見て、それに感動する。その感動はまさに自然発生的なものであり、だれもこれを否定することはできない。だが、このような「見られる自然」は、それ自体で価値を持つとしても、そのことで十分に保護しうるものであろうか。現に、観光開発によってかえって自然が破壊されていくということもある。野生生物の保護にも同じような「見られる自然」の価値やその希少性という論理が働いているが、そうした「見られる自然」の保護の主張はわれわれの生活の仕方とどのように関わるのであろうか。この点を問題にするのは、野生生物を守ろうとする自然保護論者の主張とその被害にあう農民の間には、時に対立が生ずるからである。

「見られる自然」と同じような立場にあるのが、「観察される自然」である。ギリシアの自然観も近代の機械論的自然観も、「観察される自然」として自然を捉えているということができるだろう。これらは共に、自然を観察することによって、自然の中に規則性や法則性を見出そうとして来た。今日の自然科学についても、基本的には同じことがいえる。すなわち、自然現象を客観的に観察し、データを集め、そこに規則性や法則性、因果関係を見出していこうとする手法である。そして、自然現象の中に規則性や法則性、因果関係を見出し、それをうまく利用できるならば、われわれは自然を支配したり制御できるのではないかと考えるようになる。このようにして、産業と密着した形で近代の自然科学が生まれ、科学技術として発展したことが産業革命の原動力となったとは、よくいわれることである。

他方、ベリーによって考えられている自然とは、基本的に、われわれが「使用する」ものとしての自然を基盤にしている。しかも、かれは、そのような自然を「大切に使用する (kindly use)」ことを重視しているのであって、これは、先に述べた原料としての天然資源や自然資源の利用とは根本的に異なる発想に基づくものである。なぜなら、自然の大切な使用ということのうちには、使用する側の責任ということが含まれているからである。自然を使用する人間にとって自然が大切であるのは、その自然を長く使用するという前提があるからであり、長く使用するとすれば、ますます大切に使用しなければならないからである。

これに対して、「見られる自然」、「観察される自然」、あるいは自然を資源とみなす立場において、自然との関わりは、基本的には実験や観察に関わる間の限られた一定の期間、もしくは比較的短期間であるだろう。ところが、「使用する」ものとしての自然の場合には、長期に渡ってその場にとどまらねばならないという場所的な制約がある。

心身問題について

次に、われわれにもっと身近なものとしての自然について考えてみよう。といっても、周りにある自然のことではなく、われわれの「内なる自然」つまり身体のことである。

ベリーによれば、ここでも「見られる自然」や「観察される自然」という見方が支配的である。それは例えば、現代の医学、心理学、精神分析学などの専門家の間で広く流布している。それぞれの専門家は身体もしくは精神を自己の専門領域において観察する。そうした観察を基にデータを集めたり、症例研究や実験を通して治療の仕方を確立していく。ここでは、「身体」と「精神もしくは心」は、それぞれ独立したものとみなされ、観察され、分析される。

しかしながら、ペリーによれば、身体健康は身体だけでは捉えきれものではない。同じく心の健康も精神や心の状態だけでは捉えられない。というのも、心身の問題は「健康」と深く関わるからである。現代人は、普通は、健康を「病気の無い状態」と考えがちである。

しかしながら、健康 (health) の概念は全体性の概念に根ざしている。健康であるとは全体的であることだ。「健康 (health)」という言葉は、「癒し (heal)」、「全体 (whole)」、「健全な (wholesome)」、「元気な、強壮な (hale)」、「神聖にする、崇敬する (hallow)」、「神聖な (holy)」という、一群の語に属している。健康について考えることは、これらの語が意味している遠く先にあるものを見通す必要があることを示唆している。⁽⁴⁾

ペリーのいうように、「健康」とは全体的な概念であるとするならば、身体的健康においても諸器官の全体的なバランスつまり調和が大切だということになる。今日、「いのちのつながり」とか「いのちの連なり」ということがいわれるが、それはどういうことだろうか。例えば、一個の身体を考えてみても、それは心臓や肺、筋肉や神経などさまざまな器官から成り立っているといえる。ところで、個々の器官や臓器それ自体も一つの生命とみなすこともできるのであって、他にも血液や体液の細胞のまとまり、さらには体内に住む微生物のまとまりもそれ自体生命とみなすことができるだろう。

このように個々の生命のまとまりを一つの生命体とみなすならば、自然な生命過程においては、個々の生命体がそれ自体独立した働きをなしており、しかもそれらが全体として調和しているのであって、ある生命体が別の生命体に従属しているということとはありえない。心臓が血液を送り出すために活動すると考えるのは、人間の側から見た見方であって、心臓は何かの目的のために活動しているわけではないのである。このようにそれぞれの生命体が自立的な活動をしながらも、全体として調和を保っているときに、われわれはこれを健康と呼ぶのではないか。だとしたら、「いのちのつながり」あるいは「いのちの連なり」とは、原因と影響という点において見れば、われわれの身体の内だけでなく、身体を取り巻く周りのものにも連なっているといえる。ペリーは、次のように述べている。

身体と魂、一人の身体と他人の身体、身体と世界などの間の明確な区別は可能である。しかし、明確に区別されるように見えるこれらの事柄は、にもかかわらず、それらの統一の実質を形作る相互依存や相互影響というネットワークとして捉えられる。身体、魂〔あるいは心 (mind) や精神 (spirit)〕、コミュニティ、そして世界はみな、それぞれ互いに他の影響を受けやすいものであり、それらは他のものの影響を伝えるように働く。⁽⁵⁾

それゆえ、ペリーの結論では、「身体はそれだけで孤立して全体であることはできない。人間はそれだけで全体ではありえない。身体健康が精神的な混乱とか文化の乱れ、あるいは汚染された大気や水、やせた土と共存できると考えるのは誤っている」⁽⁶⁾とされる。

さらに、ペリーは、現代社会に特徴的な「身体と精神の分離」という見方や考え方がまた、心理的・社会的にも、さまざまな影響を与えているとも見ている。そのような現象として、ま

ず身体の軽視、蔑視、自己の身体へのコンプレックスがある。このことは、ファッションやスポーツ、芸能界のスターに見られるような身体的特徴の過度の理想化や偶像視によってもたらされるものである。多くのマスメディアや雑誌などを通して、われわれにはそうしたスーパースターの身体的特徴が理想像として、毎日のようにメッセージとして届けられる。化粧品の宣伝や自動車のコマーシャルなどでは、巧みにそうした「見られる身体」のイメージを利用している。結果的に、人びとは、それらの「見られる身体」の理想像と自己の身体を比較することで、逆に自己の身体への軽視やコンプレックスを生み出すようになる。

精神や心についても同じく、精神や心を身体から切り離しそれ自体で孤立したものとみなす傾向がある。今日、「癒し」ブームということがいわれているが、ここでも身体から切り離して、精神や心の「癒し」を考える傾向は強い。しかしながら、癒しとはもっぱら心や精神に限られるものではない。というのも、本当の「癒し」は自己の精神的世界に閉じこもり、他者から孤立することによって得られるものではないからである。仮にそうすることで一時的には癒されたと感じても、日常的な競争の社会では、すぐまた孤立感に戻ってしまうことになる。

最後に、他人の身体を傷つけることについても触れておきたい。この点についてもベリーは、「身体の孤立」について述べた箇所、「身体を軽蔑することは、いつも決まって、他人の身体を軽蔑すること 奴隷の身体、肉体労働者の、女性の、動物や植物の、大地（地球）自身の身体を軽蔑すること に現れている」⁽⁷⁾と述べている。

このように、「見られる身体」の強調は、身体と精神（もしくは心）の分離から派生するものである。この点について、再び、ベリーを引用すると、

身体と魂（soul）を分離するならば、われわれの身体をあらゆる他のものから分離することになる。かくして、われわれはわれわれ自身を責め立て、唯一その代償は暴力 他の生物に、大地に、われわれ自身に暴力をふるうような孤独を強いることになる。身体と魂、身体と大地、われわれ自身と他の人々との間にどのような区別の線を引こうとも、その結びつき、その依存性、その同一性は残っている。それだから、われわれは自己の暴力を抑制したりコントロールすることに失敗してしまう。⁽⁸⁾

以上をまとめるならば、見られる身体の過度の強調や身体の蔑視、身体から切り離された精神はそれ自体で孤立してしまい、健康という全体的調和の理想から遠ざかってしまうことになる。

2．自然と人間の関わり

自然の力としての野性

ベリーの自然観を考える上で、健康の概念と同じくキーワードとなるのは、「自然の力としての野性（wildness）」という概念である。野性は海や川、山や森などの原生自然（wilderness）に備わると考えることができるが、われわれの周りの自然にも、われわれの身体にも備わるものとみなされる。「自然と共に歩む」いう評論の中で、ベリーは、「原生自然の存続は危険なものであるが、また必要なものでもある」⁽⁹⁾と述べている。というのも、「自然

の力は、われわれを非常に脅かすと同時に、われわれを保護しまた再生させるのも同じ力である」からである。⁽¹⁰⁾

ここでペリーの述べている「野性 (wildness)」の特徴としては、以下の五点にまとめられる。

1. 野性は生物いきもの (被造物) に固有のものである
2. 野性は、それ自身固有の原理に従うものであり、目的因を持たない
(原生自然およびその野性がかつては畏敬の対象であった)
3. 野性には秩序があるが、究極的には、人間はそれを認識できない
4. 多様性の原理、すなわち多様な生物の間の共存
5. 基準としての野性 (人間が自然の野性を知り、それに気づくための基準として)

第一に、野性が生物に固有なものであることは、生物が本質的に「被造物 (creature)」であるということによる。「人間は生物を作り出すことはできない。生物を作り出すのは野性である。」⁽¹¹⁾ 人間が作り出すことができるのは、あくまで人工物である。いわゆる品種改良ということによっても、野性は基本的に保持されているといえる。

第二に、野性はそれ自身の固有な原理に従うということについては、ここで固有な原理とみなされているものとは、ペリーによって「自然の秩序 (The Great Economy)」と呼ばれているものにあたる。もちろん、これは一般的な呼び方であって、例えば、自然の循環や生命の循環、生命の誕生と死、さらには別の生命としての再生などを考えることができる。もちろん、「自然の秩序」は人間のために作られたものではない。このような自然が、時には、われわれにとって冷淡に見えることもあれば、危険なこともある。

この原生自然、宇宙は、なにがしかわれわれに適したものであるが、それはまたわれわれにとってまったく危険なものである。(遅かれ早かれ、われわれは殺されるだろう) [生物としてのわれわれの死：筆者加筆]ということに、われわれは絶対的に依存している。⁽¹²⁾

「人間もまた自然の一部である」ということのうちには、われわれは自然と切り離されては生きていけないということが含まれている。しかしながら、「人間が自然から切り離されては生きていけないということは、他の生物と相違がないということではない。」⁽¹³⁾ つまり、人間は「自然を変化させることなしには、生きていけない」のである。「われわれが自然と呼ぶものは、ある意味で、この変化の全体である。」⁽¹⁴⁾

それだから、自然を使用するということはまた、人間が自然を変化させながら生きていくということでもある。このことは「自然の秩序」に合った形で変化させることを意味する。自然の使用について、ペリーは次のように述べている。

自然を使用するかしないかは、われわれに与えられるような選択ではない。すなわち、われわれは他の生命を犠牲にすることによってのみ生きることができる。われわれの選択とは、それをどのように、またどの程度まで使用するかである。これは、原則とか理論に

照らして満足し、決断しうるような選択ではない。それは、妥協を許さないならば実行できないような選択である。⁽¹⁵⁾

もちろん、人間が他の生物と違うのは、人間が文化という人工物を作るということだ。しかしながら、ペリーによれば、人間は自然の秩序（The Great Economy）が何であるか、その最終的な目的は何かを予測することはできないのであるから、「人間がその言葉の意味に従って、自然の秩序の中で生きるための選択をするなら、それと調和して生きる必要がある。自然の秩序を信頼し、それを維持し、野性の生物の行き方を考えることを学びながらそれと調和して生きる必要がある。」⁽¹⁶⁾ かくして、「自然はわれわれの源泉であるだけでなく、われわれの限界であり、基準でもある。」⁽¹⁷⁾ このことが、ペリーによって、「基準としての自然」と呼ばれるものである。

原生自然や野性、「自然の秩序」との調和は、ペリーにとって永遠のテーマであり、終わりのない問いである。

われわれには、多かれ少なかれ、われわれ自身に備わる、生まれつきの原生自然（野性：訳者註）と調和して生きられる可能性がある。そのような調和が可能であるということに私は私の人生を賭けている。しかし、それは単に、あるいは簡単にできるとは思われないし、あるいはそれが完璧にできるとは信じないし、それがなされないと確信している。かつてあるいはこれからもずっと。だが、それはわれわれの種の永遠に終わりのないライフワークなのである。⁽¹⁸⁾

表土（top soil）について

ここで、「野性」についての例として、ペリーの挙げている「表土（top soil）」について考えてみよう。表土は野性を持っている。彼は、表土について次のように述べている。

実際、われわれは表土が何であるかを知ることはできないし、それを作り出せないということを経験的に認めることなしには、われわれは表土について語ることはできない。われわれは、表土を世話すること（しないこと）はできるし、いわゆる「作り上げる（build）」ことはできるが、そうすることができるのは、表土を保護したり、表土そのもののやり方に同意したり、それと協働することによってである。われわれは、このやり方に代わるいかなる代用品ももたない。われわれは表土を作り出す（make）ことはできない。⁽¹⁹⁾

この引用からも分かるように、われわれは表土が何であるかを完全に知ることはできないし、また表土そのものを作り出すことはできない。表面的には何気ない土に見える表土にも、実は何千、何万という微生物が存在し、「生命ある生物に満ちている」。かれらもまた生命活動を行っており、われわれはそのメカニズムについて完全に知り尽くすことは不可能だからである。

ここで再度、「自然法則としての自然」という見方について述べておこう。この自然観は、われわれは自然を認識しうるという前提に立っている。ペリーに従うならば、それはあくまでも自然の一部を理解し、認識しているにすぎないのであって、自然の全体を理解することには

ならないのである。このことは、近代の自然観すなわち機械論的自然観、ガリレイやニュートンの数学的自然科学についてもいえることであり、数学的な自然理解が明らかにしたものは、宇宙や地上の物体の運動についての力学的関係であって、この関係は自然の秩序についての一面を意味するにすぎないのである。

他方、われわれの回りにある土壌つまり表土については、確かに野性をもつが、それだけではない。土壌の栄養いわゆる地力、浸透性、保水性の点から見れば、表土は原生自然の土壌よりもはるかに豊かなものである。ペリーは次のように述べている。

健全な土壌の原生自然は、人間の理解にとっては余りに複雑であるが、それは管理しうるし、人間の世話から恩恵をうける。そして、逆に計りがたい利益をもたらす。⁽²⁰⁾

農耕の歴史を見れば明らかなように、表土は人間が原生自然を変化させようとして作り上げてきたものである。もちろん、天然のプレーリーのように、元来原生自然が豊かであった地域はある。しかし、そこでも人間はその表土に働きかけ、世話をし、豊かさを作り上げてきた。それは、自然との調和に基づいており、「それには知識、技術、抑制が必要であり、それらは過去から生じたものである。」⁽²¹⁾

結論を先取りしていうならば、ペリーの自然は、「野性」と「洗練されたもの」(domesticity) という二重の意味をもつものだといえる。つまり、人間の関わる自然とは、一面では「野性」というものを保持しながらも、他方、人間に固有の文化という側面を持っているということだ。同じことは、いわゆる野生生物とは区別される家畜や家禽 (domestic animal) についてもいえる。

それゆえ、ペリーがいうように、人間もまた自然の生物であるかぎり、自らの身体的生命は半ば「野性」を持つが、われわれが「暮らしを立てる」(make a living) とか「生活する」という意味では、人間は「洗練された (domestic) 生物」であるということができる。

ここでわれわれは、山間地や里山、田んぼや畑など、人間の手が加えられた自然について考えることができるだろう。もちろん、このような自然は人間化された自然であり、原生自然とは区別される。したがって、このような自然は、人間によって使用され、世話を受けることで、自然の豊さが保護されて来たのみならず、観察することができる。そしてペリーは、原生自然の保護のためには、このような人間によって手を加えられて来た自然の保護が不可欠であるという。これはまた、農業や農村のコミュニティを保護するという主張にも通じている。

それだから、ペリーは次のように言うことができる。すなわち、「人間の自然に対する適切な関係は、対立することではない。」⁽²²⁾ また、「洗練された (domestic) ものと野性的 (wild) なものとの間の平和は可能である。」⁽²³⁾ というのも、「野性と洗練されたものは、対立するものでなく、相互依存的なものである」⁽²⁴⁾ からである。さらには、「人間の経済および野性は、共に、共存可能性のみならず、相互の利益のためにも存在できる」からである。⁽²⁵⁾

いわゆる人間による自然支配という考え方の根底にあるのは、自然を人間にとっての脅威、自然と人間を対立するものとみなすこと、科学技術という手段をもってコントロールしようとすることである。

結論として、われわれは、ペリーの自然理解には、野性と洗練されたものという二つの側面

があること、人間と自然は対立するものではないことを見てきた。しかしながら、「人間の価値と自然の価値の対立は、しばしば、両者の価値を犠牲にすることからも生ずることがある。」⁽²⁶⁾ それだから、次に、自然の価値と人間の価値、自然の秩序と人間の秩序（文化の秩序）を調和させる場所としてのコミュニティが問題となる。

3. 個人の自由とコミュニティについて

個人の自由

コミュニティという言葉は、「共同体」、「地域」あるいは「地域共同体」などと訳される。ベリーは、アメリカにおけるコミュニティの現状について、次のように述べている。

現代に流行している二つの病気　その上に治療のための実際上の産業が築かれてきたのだが　それは、共同体（コミュニティ）の崩壊と個人の分散である。この二つが関連していること（例えば、個人の孤独は社会的混乱に必然的に伴うものである）は、実に明白な事実である。⁽²⁷⁾

ベリーがここで念頭においているのは、まずもって、アメリカの農村社会におけるコミュニティの崩壊である。また、年代的には、このようなコミュニティの崩壊が第二次大戦前後から大規模に始まったとあってよいだろう。日本においても、高度経済成長を機に伝統的な村落共同体が解体して、現在に至っているといつてよい。

だが、われわれはここでアメリカのコミュニティの歴史をたどるつもりはない。また、コミュニティ概念の詳細な分析、コミュニティの規模などを論ずるつもりはない。ここで興味深いのは、ベリーが、コミュニティの崩壊と個人の分散を関連づけている点である。

ベリーは、「性、経済、自由、コミュニティ」と題する評論において、アメリカにおけるコミュニティの崩壊を個人の自由を求める要求に対比させて論じている。以下では、その論点に従って、自由を個人の自由、パブリックな自由、コミュニティの自由の三つに分類し、それぞれの自由との関連でコミュニティの問題について論ずることにしたい。

そのための前置きとして、ベリーの述べているコミュニティの定義、すなわちコミュニティとは、「共通の富、共通の利益、共通の理解、ある場所に人びとが共に暮らし、そうし続けることを望むこと」という定義⁽²⁸⁾にしたがって、ここではコミュニティの特質を、共同性（「共通の富や共通の利益」）、帰属性（「共通の理解」との関連で）、地域性（「場所」）の三点にまとめておくことにする。

自由といえば、いうまでもなく、その第一に挙げられるのは個人の自由であるだろう。個人の自由に含まれるのは選択の自由、職業選択の自由、行動の自由などである。そして、このような選択の自由や行動の自由の背後にあるものとして、目的であれ手段としてであれ、個人の「自己成長」や「自己実現」という理想が挙げられるであろう。このような自由は、コミュニティの共同性からの離脱、その制限や制約からの解放とみなされてきたといえる。すなわち、ベリーによれば、近代社会では、「人びとは、法律が許す範囲で、あらゆる制約、制限から自己を解放することが、個人としての自己実現のためには必要だと教えられてきた」⁽²⁹⁾ のであ

る。こうして、今日においても、個人の自由は、「厳密にいて、それ自体をコミュニティの生活の制約から逃避することとみなされがちである。」⁽³⁰⁾ このように、個人の自由や自己実現の要求は、コミュニティの共同性とは別の価値を持つだけでなく、コミュニティの生活における制約からの解放として、それ自体価値を持つものとみなされてきたといえる。

次に、パブリックな自由とは、ベリーによれば、質的には個人の自由と同じものである。つまり、パブリックな自由は、個人の自由がある政治体制を構成するすべてのメンバーに等しく与えられるべきだということを原則としている。この例として、ベリーは言論の自由を挙げている。すなわち、パブリック（公共性や公益性）という言葉には、「だれにとっても」という意味での普遍性が含まれているのであって、言論の自由とは誰にとってもその自由が与えられるべきだということが含まれている。

ここで、個人の自由やパブリックな自由の一形態として、企業による経済活動の自由について述べておくのは重要である。というのも、経済活動の分野では、企業や法人も「個人」として、自由な経済活動の主体としての権限を与えられているからである。しかしながら、ここで注意すべきは、このような企業や法人が通常の意味での個人とは比較にならないほどの強大な権力や力をもつに至ったということである。このことは企業による生産、流通、販売上の戦略、マスメディアを通じての商品の宣伝や消費者の意識への働きかけ、需要の拡大などというスロージョーグを考えてみれば容易にわかることである。

コミュニティの自由

これに対して、コミュニティの自由とは、ベリーによれば、本質的に個人の自由やパブリックな自由とは区別されるものである。というのも、この自由は、コミュニティの第二の特質である「帰属性」に深く関わっているからである。つまり、コミュニティの自由は、本来的には、そのメンバーに対して与えられる自由を意味しているのであって、その際に自由を与えることと引き換えにメンバーとしての責任が伴うからである。ベリーは、このことを次のように述べている。

コミュニティの自由はより基本的であり、より複雑である。コミュニティは、そのメンバーに自由を与えるが、その自由には、親しみ、相互の尊敬、相互の愛情、相互扶助が含まれている。コミュニティは自由に適切な目標を与えるし、その自由には責任が伴うが責任を前提にしている。そのような責任なしには、自由とは認められないし、長い間に渡って自由であることはではない。⁽³¹⁾

つまり、コミュニティの自由にとっては、本来的に、コミュニティの目標やメンバーの責任ということが前提であり不可欠だということだ。コミュニティの自由とは、個人の自由とはちがって、決して抑制のない無制限な自由を求めるものではなく、あくまでも目標にふさわしいものでなくてはならない。

ここでコミュニティの第三の特質である「場所」あるいは地域性について述べておきたい。ベリーの考えるコミュニティのモデルが農村のコミュニティにあることは、先にも述べておいた。コミュニティの自由との関連で、場所が重要なのは、土地は農場という生産手段でもある

ように、農村においてコミュニティは生活の場であるとともに、自立した生産と消費の場を意味するからである。もちろん、ベリーは余剰生産物がコミュニティの外部で消費されることを認めていないわけではない。しかしながら、あくまでも、コミュニティは自立した経済の場とみなされる。

それゆえ、ベリーにとって、土地やコミュニティの破壊は、必然的に自らの生産手段と生活の場を破壊することにつながるものである。ベリーは、「人、土地、共同体」は人間が作るものであり、文化の概念に含まれると述べているが、これらはまた固有の秩序を持ちながら、自然の秩序と調和するものでなくてはならない。言い換えれば、コミュニティの崩壊は、文化の秩序と自然の秩序、双方の混乱に起因するものとみなされるといえるだろう。

コミュニティを守る

コミュニティには、自由の他に、固有な価値はあるのだろうか。われわれは、それは個人が何らかのコミュニティの中にいる時の、「安全」や「安心」にあると考える。そして、このことはまたコミュニティの帰属性にも大いに関係している。というのも、われわれは通常「親しみ」、すなわち良く知っている人々や土地に対して安全や安心を感じるのであって、あまり知らない人々や土地には信頼を寄せたり愛着を持つことはありえないからである。他人に対する信頼、他人からの受容、自己が認められていると感じることのできる自尊感情などはみな、安全や安心に通じている。それゆえ、ベリーが述べているような、コミュニティにおける「相互の尊敬、相互の愛情、相互扶助」なども、安心や安全の感情と結びついているということができる。これに対して、個人の自由や「自己実現」が「競争」と結びつくならば、そこには個人の分散、不安が生まれることもある。今日の社会における精神的ストレスや孤立感、無力感は、個人の自由と自己実現の要求がもたらした否定的側面とみなすことができるだろう。

最後に、コミュニティの「安全」をコミュニティの自然や環境という面からも述べておきたい。いうまでもなく、コミュニティの自然破壊や環境破壊はコミュニティの安全を脅かすものである。コミュニティの共通の財産であるきれいな水や空気、土壌などは、農村のみならず都市においても、健全なコミュニティの生活を維持するためには欠くことができない。しかしながら、都市における便利な生活はしばしばローカルな場所における自然や環境の破壊をもたらしている。あるいは、国内での安価な資源の消費や浪費は、熱帯雨林破壊などに見られるように、海外でのローカルな場所（自然や環境）、ローカルなコミュニティと人びとの生活に深刻な被害を与えている。

以上のことから、ここで一つの仮説を立ててみたい。それは、近代の産業社会および現代の科学・技術に基づく社会は、人間が暮らし生きていく場所、コミュニティとしての「場所」の問題を充分には考慮に入れては来なかったのではないかということである。なぜなら、利潤の追求や効率を最優先するがぎり、産業社会はどここの場所、どこの土地においても、同じような産業が成り立つということを前提にしているからである。もちろんわれわれは、産業や工業の立地条件を無視しているわけではない。しかしながら、産業や工業の立地条件とはあくまでも農業という生産の場としての土地とは意味合いがことなる。さらに、今日のグローバル経済は基本的には場所と無関係であるといえるのではないか。必要ならば、強力な輸送手段と広範な通信技術網を使って原料や食料を外国から運び、商品を海外に輸出することによって成り立つ

経済だからである。このような経済では、原料や食料がどこでだれが生産したのかということは問題とならない。消費者にとっての選択の自由、商品の価格、便利さを考慮することはあっても、コミュニティを成り立たせるものとしての「ローカルな人々、ローカルな文化、ローカルな自然との相互依存関係」(ペリー)に、それがどのような影響を与えているかということは視界の外にある。

これに対して、ペリーにとって、自由とはまずもってコミュニティの自由を意味することは明らかである。なぜなら、自由とは、本来、土地やコミュニティ、コミュニティを取り巻く自然を維持するために、さらに豊かにするという目標のために用いられるものだからである。そのさいに、土地や自然に対する愛情、人々の相互の信頼、相互の愛情、相互扶助はコミュニティにとって不可欠のものである。ペリーは、「健全なコミュニティは、健全な身体と同じく、そのメンバーにとって相互に支えあい、役立つものである」⁽³²⁾と述べている。また、「コミュニティの健康は、まちがいなく信頼に基づくものである」⁽³³⁾と述べているが、これはコミュニティにとっても自然にとってもあてはまる。ペリーにとって、自然を保護するということは、ローカルなコミュニティを守ることと同義なのである。

結論 自然と経済

ペリーにとって自然とは、まずもって「使用する」ものとしての自然を、しかも「大切に使用する」ものとしての自然を意味している。さらに自然はコミュニティとしての「場所」でもあることが明らかにされた。このような自然のモデルとなっているのは、農場としての自然、表土としての自然、さらには野性および「洗練された」ものという性格をもった人間にとっての自然である。

このような自然は、天然資源や自然資源としての自然、つまりそれを使用したり利用すれば消失してしまうような「原料としての自然」ではない。もちろんエネルギーとしての自然でもない。ペリーのいう自然は「有限な資源」ではなく、その豊かさが持続するような自然であり、真の意味で持続可能な自然であるということが出来る。この意味でも、今日われわれは「持続可能な開発」や「持続可能な社会」ということの意味をもう一度よく考えてみる必要があるだろう。

われわれは科学・技術を否定するつもりはないし、それに全面的に反対だということではない。しかしながら、大量生産・大量消費・大量廃棄によって規定される今日の経済システムは、明らかに、ますます多くの資源とエネルギーを消費せよという要求や主張によって支えられているといえるのではないか。このような経済システムは、必然的に人びとにますます多くの欲望をかきたてるべく働きかけなければならない(コマーシャルや宣伝広告など)という点から見ると、主観性(欲望と貪欲)に依拠した経済学であるといえる(われわれはこれに慣れっこになっているが)。そうして、人びとはますます多くの財やサービスを求めてお金を稼がねばならなくなる。

商品経済はまた、今日の労働のあり方を変えてしまった。労働はお金を得るための手段となり、仕事はますますお金という価値に依存してしまう。労働や仕事においては、ますます労働力の節約やエネルギーの低廉ということが価値を持つようになる。こうして、少ない労力で最大の効果を上げることが、労働の美德となる。かくして、労働は本来の固有の価値

(例えば「他人の役に立つこと」など)を見失っている。

しかしながら、そのような経済効率や便利さ、物質的豊かさの追求が、他方で地方の自然や環境破壊を生み出す原因となっていることに、今や多くの分野で人びとは気づき始めている。というのも、経済活動によってもたらされる経済の外部費用、すなわち自然破壊や環境汚染に目をつぶることは 自分たちの目の前だけはいつもきれいで清潔に見えるようにと、産業廃棄物を過疎地や低開発地域に押し付けることなど 問題の先送りにしかならず、後で大きなツケを負うことにもなるからである。

経済学者の宇沢弘文氏は、「社会的共通資本」の概念をもって、地域社会での本当の豊かさを問うことになった。ベリーの自然観や自然理解もまた、ローカルなコミュニティを基盤にした真の豊かさとは何かという問題を投げかけている。「自然をどうみるか、それは結局みられるべき自然の側の問題ではなく、私たちの側の問題である」⁽³⁴⁾ という、故高木仁三郎氏の言葉は、全く正しいものである。われわれは、この地上で何を求めているのか、人間にとって本当の豊かさとは何か? この問いは、自然の側からわれわれに投げかけられている問いでもあるように思われる。

註

- (1) 『いま自然をどうみるか』、高木仁三郎、白水社、1998年、69ページ
- (2) Wendell Berry, *The Unsettling of America*, Sierra Club Books, 1977, p.26
- (3) 博士論文『持続可能なコミュニティづくりとしての内発的發展に関する研究』、新 広昭、金沢大学大学院社会環境科学科に提出、2001年、33ページ参照
- (4) *The Unsettling of America*, p.103
- (5) *ibid.* p.110
- (6) *ibid.* p.103
- (7) *ibid.* p.105
- (8) *ibid.* p.106
- (9) Wendell Berry, *Home Economics*, North Point Press, 1987, p.17
- (10) *The Unsettling of America*, p.130
- (11) *Home Economics*, p.140
- (12) *ibid.* p.138
- (13) *ibid.* p.141
- (14) *ibid.* p.7
- (15) *ibid.* p.139
- (16) *ibid.* p.58
- (17) *ibid.* p.7
- (18) *ibid.* pp.138-139
- (19) *ibid.* p.62
- (20) *ibid.* p.14
- (21) *ibid.* p.15
- (22) *ibid.* p.9
- (23) *ibid.* p.11
- (24) *ibid.* p.12
- (25) *ibid.* p.12
- (26) *ibid.* p.10
- (27) Wendell Berry, *Standing by Words*, North Point Press, 1983, p.24 (邦訳『言葉と立場』、谷 恵理子訳、マルジュ社、1995年、32ページ)
- (28) Wendell Berry, *Sex, Economy, Freedom & Community*, Pantheon Books, 1992, p.119
- (29) *ibid.* p.151
- (30) *ibid.* p.150

- (31) ibid. p.150
- (32) ibid. p.155
- (33) ibid. p.161
- (34) 『いま自然をどうみるか』, 260ページ